

講演三

百済仏像と東アジア

講演者紹介

大西 修也（おにし しゅうや）

早稲田大学大学院修了後、ユネスコアジア諸国派遣留学生として韓国・東国大学校大学院に留学。仏教美術史研究の第一人者・黄濤永博士に師事、日韓古代彫刻の比較研究に新たな道を拓く。九州大学名誉教授。専門は東洋美術史学（仏教彫刻史ならびに仏教図像学）。文学博士。

・講演三 「百済仏像と東アジア」

大西 修 也（九州大学名誉教授）

「百済の仏像と東アジア」がテーマとなっていますが、貯水池跡から仏像が出土した翌年（平成二十一年）六月に開催された講演で、百済の仏像についてはご説明申し上げたつもりです。また温故創生館や熊本県教育庁から刊行された出版物にも発表内容が掲載されていますので、重複するところは簡略させていただきます、今日はもう少し視野を広げて三国を統一した新羅も含めて、中国あるいは朝鮮半島から日本を見てみようと思っています。日本から朝鮮や中国をみる人とは逆になりますが、少し違った角度から日本を見ていただく良い機会かもしれません。また鞠智城の役割といいますが、何故に突如『続日本紀』文武二年（六九八）に登場するのか、私なりに考えてみたいとも思っています。役割については、すでに鹿児島といいますが、大隅とか薩摩の方への律令体制を拡大していく一つの拠点となったのではないかという解釈がだされていますが、そうした点にも言及できればと思っています。私は山城研究家でもなんでも無いのですが、約四〇年近く韓国とも関わってきましたのでいろんな山城を見る機会もあり、新羅の都であった慶州を中心に防衛と造寺造仏あるいは国防と仏像という新たな視点から、白村江以降の東アジア情勢について考えてみたいと思います。



写真4 大西修也氏

一、鞠智城貯水池跡出土像の特徴

配布資料で説明をしておきましたが、鞠智城出土の菩薩立像と鹿兒島県日置郡吹上町伊作地区に伝世した菩薩立像は、いずれも胸元に容器のような持物を持っているのが大きな特徴です（資料篇一八・一九頁図一～図四参照）。この写真は貯水池の底部で最初に発見された時に撮影されたもので、この色は時間が立つと少し変わっていくもので、先ほども山城の下から出た木の葉が緑色だということもありましたが、本当に色が変わってしまっています。泥を落として洗浄した状態がこれです。一三〇〇年近くも水のある地中にあつたとすれば、当然水に含まれた鉱物質などが一種の皮膜となつて仏像の表面を覆った状態になる。ですから見られない被膜の下

を推測しながら判断せざるを得ない。この仏像を復元するときも、京都のあるメーカーさんに詳細な写真を撮ってもらい、三次元のスキャナーで収録した資料も検討しながら、現在考えられる復元形がこういう姿であるということになりました。

仏像の頭部は、正面と両側面に一種の花型の飾りとなっていて、三面宝冠とか三面頭飾という呼び方をされています。こういう三面宝冠が出てくる時代はある時代に限られております。また、背面を洗浄してみるとこういう形状で出てきました。これは何を表したのかというと、肩をシヨールで覆ったように見えますが、このシヨールにあたる部分が天衣というもので、肩を覆った後で前の方へ出てきます。それがどう処理されているかをみることで造られた時代も判ってきます。復元図を見ていただくとわかりますが、肩を覆つ

た天衣が腕の内側を通って真直ぐ下りてきます。その垂下の仕方も実は問題でして、鞠智城出土像の天衣は垂下した下端部が前方に突き出すように表わされているのが特徴なのです。この前方にぐっと突き出すという独特な形がなぜ生みだされたのか。このことは、飛鳥時代とか白鳳時代という呼称で知られる日本の時代区分とも深くかわる問題でして、飛鳥時代の美術とか白鳳時代の美術と言っても、これは絵画が決めたのではなく彫刻によって決められたことなのです。三次元からなる彫刻というのは人間が眼で見て把握する（鑑賞する）のに合理的にできていて、作る側も眼で確認しながらつくるわけで、彫刻はもともと科学的に判断し易いものなのです。科学が合理的に説明できなければいけないように、彫刻がどのように移り変わって行ったかを明らかにする彫刻史が学問として成立するのは、その変遷を合理的に説明できるからなのです。

二、鹿児島県吹上町伊作伝世像との比較

ところで、鞠智城の貯水池跡から出土した菩薩立像については、すでに報告書等において七世紀中頃から後半にかけて制作された百済仏に共通した特徴が認められることを明らかにしています。今回新たに取り上げる鹿児島県日置郡吹上町伊作地区に伝世していた金銅菩薩立像は三十年ほど前に飛鳥仏発見として話題をあつめた仏像です。たしか一九八一年だったと思いますが、ある鹿児島の新聞社から仏像発見の記事に写真が一枚添えて送られてきました。その新聞社で記者をしていた教え子が届けてきたものですが、先生ご覧になりますかと聞かれ見に行ったのが始まりで、その後何度か足を運ぶことになりました。

伊作伝世像（資料篇一九頁図三）の特徴について見てみましょう。鞠智城出土像の場合は胸元に筒状の容器を捧げ持つスタイルですが、この仏像は胸元に両手で小さな珠状の持物を捧げ持つ宝珠捧持形菩薩立像で

す。同じ宝珠捧持菩薩であっても、作風といえますか彫刻様式からいうと、伊作伝世像の方が今回鞠智城から発見された仏像より時代が遡る古いタイプの仏像ということになります。そうした新しいタイプの仏像が何故に鞠智城から出てきたのか。そのことと百済がどう関係するかが実は問題なのです。

伊作伝世像の特徴は、飛鳥時代前期といえますかね、七世紀の前半の彫刻の特徴を明確に示しています。

先ほど鞠智城出土像の背面を見ていただきましたが、肩をショールのように覆っていた天衣が腰の下までさがり背中が丸見えになっていて、腰の中央部分に菩薩が身に着けているスカートにあたる裙を縛った帯がみえています。正面からみると、少し判読し難いかもしれませんが、体の両側面に天衣をはじめとする装飾が末広がり横に張り出すように表わされています。ところが鞠智城出土像の場合は、それとは全く違うのです。その違いは横から見てもはつきりわかります（資料篇一九頁図四）。いずれも少しお腹を突き出した“く”の字となっているのは似ていますが、伊作像は背丈が長身につくられ、鞠智城は少しずんぐりした体型に特徴があります。

三、視覚による仏像変遷の見方

その違いが何を意味するのか、次のスライドを見ていただきます。左は有名な法隆寺東院夢堂の本尊救世観音菩薩像、中央は大宝蔵院観音堂の百済観音菩薩像、そして右が夢違観音菩薩像です。救世観音は聖徳太子の在世中か死後間もない頃の作とみられますから、六三〇年以前には出来上がっていたと考えられます。スライドに「飛鳥彫刻から白鳳彫刻への変化」とあるように、これらの仏像をみていくと日本の彫刻がどのように移り変わっていったかがはつきりわかります。下に「視覚による正面観重視の表現から側面や觸

知的感覺を重視した表現へ」と書いておきました。これは、救世観音は正面から見ることを重視して作られた仏像ですから正面から見て大きく見える方がいい。だから天衣などを横に張るのです。それに対し百済観音は、正面からみても天衣が垂下していることが分つても、どんな形をしているのかわかりません。実は下端部で前に突き出るように曲がっているのです。例えば、腕を直角に曲げて掌を広げた手を前に突き出します。これを正面からみても肘から先がどのようになっているのかわかりませんが、斜め横から見るとわかってきます。このように日本では七世紀の中頃にかけて、横から見られることを期待して作られた彫刻が主体となっていくのです。さらにそれを過ぎると、「視覚の触知的作用」という、眼で彫刻を撫でるといふか、胸のふくらみとか臀部の豊かさを眼で触れるように追って鑑賞していく彫刻が作られるようになるかと考えてください。ですから日本の彫刻は飛鳥から白鳳時代にかけて、救世観音から百済観音そして夢違観音へと大きく移り変わって行ったことが視覚的作用から説明できるのです。したがって鹿兒島の伊作伝世像は救世観音タイプ、鞠智城出土像は百済観音タイプなのですが、背丈が長身からややずんぐりした背丈に変わってきている。そこに鞠智城出土像の重要なポイントがあるのです。

四、宝珠捧持菩薩の役割

ところで鞠智城出土像や伊作伝世像はいずれも中国の南朝や朝鮮の百済で盛行した宝珠捧持菩薩像の流れを汲む仏像で、「珠持ちの菩薩」とも呼ばれ中国や朝鮮では観音菩薩として信仰されていました。わが国の宝珠捧持菩薩像のなかで制作年代がはっきりしているのは、法隆寺献納宝物中の辛亥年（六五一）銘金銅菩薩立像と大阪観心寺の戊午年銘（六五八）観音菩薩像です。わずか七年しか違わないのですがはっきりとス

タイルが違っていることがわかります。それにもう一つ、これらの菩薩像で注目していただきたいのは、スタイルが異なるにも拘わらず、いずれも宝冠に化仏と称する小さな如來の姿を表していることです。これは、これらの菩薩が観音菩薩としてつくられたことを暗示しています。観音が宝冠に化仏を表わすようになるのは、浄土宗関係の根本經典である『無量壽經』や『觀無量壽經』という經典の教えがわが国に伝えられた以降のこと、それ以前に造られた有名な救世觀音像にしても宝冠に化仏は表されていません。もちろん鞠智城出土像や伊作伝世像の宝冠にも化仏はない。つまり同じ觀音菩薩として造られたとしても、鞠智城出土像などは宝冠に化仏を表わすという意識が働いていない彫刻であって、私は初期の觀音菩薩として辛亥年銘像など他觀音菩薩と区別しています。

観音さんというと皆さんは阿彌陀さんの傍らにいて西方浄土へ導いてくれる観音さんのことを思い浮かべることでしよう。あるいはこの現世にあつて、浄土へ行ったり来たりできる観音さんだという認識があるかもしれません。そうではなく百済や日本で信仰された初期の観音は、西方浄土ではなく彌勒とそつじょうどの兜率浄土へ導いてくれる観音さんとして捉えていたと考えられるのです。聖德太子が中国に派遣した惠隱えおんという僧侶が帰国して『無量壽經』を伝えたのは確か六三九年、宮中をはじめ各地でこの經典が説かれはじめたのはそれ以降ですから、宝冠に化仏の標識をもつ辛亥年銘像などはその影響だと思っています。

もちろん百済が滅亡する三国末期の百済仏や新羅仏のなかには宝冠に化仏を表わした觀音菩薩が僅かながら含まれています。ですからそれ以前の宝冠に化仏を表わさない觀音の流れを踏襲しながら、伊作伝世像よりは一步進んだスタイルをみせる仏像それが鞠智城出土の觀音菩薩なのです。私に言わせると、こうした独特な仏像様式が生みだされた背景には、百済における隋初唐様（七世紀初頭の中国仏像様式）の影響があつ

たと考えているのです。しかも同じ宝珠捧持形の菩薩でありながら、鞠智城出土像が胸元に抱いている持物は宝珠ではなく円筒形の容器となっている。おそらく舍利容器を表そうとしたものでしょう。そもそも宝珠奉持菩薩は胸元に舍利の入った壺や甕を抱く舍利供養菩薩から出発したもので、その原点ともいえる容器の形態をはっきり表わした観音菩薩となっていることに鞠智城出土像の大きな意義があると思っています。事実、百済の都であった扶餘から胸元に幅広い容器を抱いた宝珠捧持菩薩が見つかっており、百済から亡命して来た高官が持っていた仏像（持仏）であった可能性が一番高いと申し上げてきたのです。九州で大野城や基肆城が築かれたとき憶礼福留を始めとする百済將軍が指導者として送られて来ますが、憶礼福留は白村の江で戦って敗れ、翌年日本の兵士と一緒に逃げてきた百済將軍です。そうした人たちをすぐにも活用して山城を築き国防を高める必要性に迫られていました。異国で生きていくことを余儀なくされた人たちが、唯一の拠りどころとして仏像を持ってきたことは十分考えられるところです。

五、百済台頭の源泉

歴史家にとって未解明の事柄を明らかにすることは楽しみなことです。そんなときの基本的な考え方として、昔から恩師に常々言われていたことがあります。七つで語れということです。一つのことを語るのに、自分がこれまで知ったことを十とすると、そのうちの七つを持って語れということです。わかった十すべてを用いて明らかにしても、違う資料が出てきて反論されたらどう答えるのか、大変厳しい先生でございました。後々何が出てくるかわからないわけですから、何か出てきたために大切な資料を残しておき、手の内をさらすなという考えに近いかもしれません。この歳になればもうそんな必要はないのかもしれないですね。

前回、百済の仏像について紹介した後、古閑三博文化財保護協会長もすぐ百済に行かれ瑞山磨崖三尊仏や益山弥勒寺跡を見学されたと伺っていますが、その益山を中心に七世紀前半の百済文化について考えてみましょう。弥勒寺をはじめ益山の遺跡は、百済の武王時代に造営されたというのが韓国学界の結論で、実はこの武王代に隋初唐様が導入されたと考えられるからです。百済第三十代の武王は、六〇〇年から六四〇年頃まで四〇年以上にわたって百済を統治しました。近年わが国では、内閣が二年もたずころろ変わって、これが日本の国力が落ちる最大の原因だと、皆さんも考えていらつしやる。でもこれも国民が出した結果でもあるのです。古代朝鮮にあつて、百済が力をつけたり新羅が勢力をのばすというのは一人の王がどれだけ長く統治をしたかにかかっていたのです。百済が国力をつけ強くなって行くきっかけは、六世紀後半に即位した威徳王いとくおうからで彼が四〇年、そして七世紀に入つて武王が四一年、この二人の治世下で非常に国力が増大します。実は日本に仏教を伝えた時の百済王は聖明王といいますが、その跡を継いだのが子の威徳王で、彼は技術者を派遣するなど日本仏教の発展に尽くしてくれた王なのです。国力を付けたからわが国の発展にも協力ができたということでしょうか。

六、百済武王と益山弥勒寺

全羅北道益山にある弥勒寺跡には数年前まで西側に石塔（資料篇二四頁図版一）が残っていましたが解体されました。全部上から一枚一枚剥がす方法がとられました。私が若い頃、この西塔に入っていきますと真ん中に四角い心柱がありました。高層建築である仏塔に心柱は欠かせず、石塔でも心柱があつたのです。日本の統治時代に石塔をコンクリートで補強する修理などを行ないましたが、心柱に舍利があるなど誰も考え

ませんでした。ところが解体のとき石材を全部上から剥がしていきますからわかったのです。心柱の一番下の石が中空に穿たれ、そこから舍利容器が出てきました。一緒に埋納された銘板には、武王の王后が舍利を迎えて己亥年（六三九）正月二九日に祀ったと明記してありました。百済の階級で佐平サヘイという大臣にもなれる高い身分なのですが、王后はその佐平沙宅サタクセキタク積徳の娘であると出自について書かれていたことは、武王代の歴史を考えるうえで注目されます。

弥勒寺が弥勒信仰と深いかわりをもつことは、寺名はもとより背後にある弥勒山という山名、ならびに弥勒寺創建の説話から推測されてきましたが、今回出土した舍利銘板の内容からも裏付けられました。創建について記した武王にまつわる伝説（薯童伝説という）によると、王と王妃が池の前を通ると池中から仏が出現する。そこで王妃は此処に寺をつくることを王に誓願し三所伽藍を造ったということです。補処の釈迦とも言われる弥勒は、やがて二代目の釈迦となつてこの世に下り、三ヶ所で説法して人々を救済すると言われています。それを弥勒三会、龍華りゅうげさんえ三会というのですが、その三ヶ所にちなんで伽藍を三つ建てたことになりました。私が一九七〇年代のはじめに訪れた時は、寺域の真ん中には何にも無くて小さな川が流れ、東西に石塔と石塔の跡だけが残っていました。これらの石塔を中心とする二つの伽藍かなと思っていたら、水が流れていたと真ん中から木造の伽藍址が出てきたのです。しかも今回心柱からみつかった舍利莊嚴具から六三九年に納入されたことがはっきりしたのですから、伽藍そのものはそれ以前に出来ていた可能性が高まったことになります。しかも、解体する以前の西石塔の調査によって、この石塔が唐の營造尺（二九・六九センチ）でつくられた可能性が指摘されており、武王代における隋初唐様式の導入と深くかわっていたことが窺えるのです。事実、武王代に派遣された遣唐使は十一回に及んだことがわかっています。

皆さんは白村江を百濟滅亡の象徴のようにいますが、私に言わせればこの武王代に高まった国力、それを維持できれば滅亡することはなかったと思っています。ところがその晩年、『日本書紀』皇極元年(六四二)にも出てきますが、百濟大いに乱れるという事態になります。国を二分した大変な内紛が起り、ついには王族をはじめ四〇人あまりが追放され、日本に亡命することになります。

七、仏教圏拡大の詔勅と鞠智城の役割

先ほどの狩野先生の講演を拝聴していますと、『書紀』の記載を大切にされ山城が記されていないこと自体に大きな意味を見出されようとしているように感じました。『書紀』の記載については後述する内容とも関係するので一言申し上げますと、間違いだらけの『書紀』と言った方が良くくらいで、数多くの誤りや重複記事がみられます。例えば、有名な法隆寺の記載についてみても、天智八年(六六九)に斑鳩寺が火災になったとあり、翌年にも夜半に落雷があり法隆寺が全焼したと記されている。斑鳩寺は法隆寺のことですから二年に亘って同じ記事が収録されたことを示しています。まあこんな具合ですから、間違いだらけの『日本書紀』と言いたいところですが、見過ごしてならないのは『書紀』編纂のコンセプトは何かということです。

特に、仏教が伝来したとされる欽明紀(巻一九)から最後の持統紀(巻三〇)に至る一五〇年間は美術史という飛鳥・白鳳時代にあたり、奈良の飛鳥地方を中心に政治が行なわれた時期でもあります。この欽明紀以降の内容を読んで感じるのは、正史であるにもかかわらずあまりにも日本仏教の興隆にかかわる事柄に偏重していることです。私は、日本最古の寺である飛鳥寺を題材に、皇室を中心とした仏法興隆の歴史を書き上げることだったと考えていますが、この『書紀』最大の疑問について歴史研究者は、舍人親王(天武天皇の

子)が責任者となった最終段階で編纂方針が変えられ、仏教的な記録が数多く収録されることになったとみえています。

そうした編纂方針によるかどうかわかりませんが、鹿児島県の伊作伝世像の将来時期、あるいは鞠智城の役割について考えるときに私が注目しているのは、『書紀』持統六年(六九二)に発せられた詔です。持統天皇が大宰府のトップであった大宰率^{そら}河内王に下したもので「詔して曰く、宜しく沙門を大隈と阿多に遣わして仏教を伝えるべし」とあります。これは鞠智城の名が正史である『続日本紀』にはじめてみえる六年前のことです。もちろん当時の東アジア情勢というか朝鮮における緊張関係とも関わっていると思いますが、この詔勅が出されたことで大宰府にもう一つ新たな役割が加えられたことになったと考えています。鞠智城の役割について熊本県教育委員会事務局の西住欣一郎氏は、改築紀(六九八年)以降は官衙^{かんが}的機能を利用して肥後から南九州を統括する役割を担っていたと指摘しています。ようするに鹿児島といいますが大隈とか薩摩方面への進出拠点という意味が非常に強くなってくるわけです。

しかしながら、天武天皇が崩御したとき都に住んでいた隼人三百人以上が駆けつけて哀悼を示したことを考えると、大隈や阿多への進出は単なる領土拡大をめざしたものではなく、律令体制を推し進め仏教を広めるといえる大儀名分のもとに行われたとみています。持統は後の時から篤く仏教を信仰する人でしたから、天武の跡を継いで即位するや仏教を全国に広め国民を導いていくのだという強い決意をいだいていて、その表明が先の詔だったのでしょう。創建期に鞠智城は後方支援の役割を担っていたという話もありますが、この詔を契機に国防の最前線は北から南に転換され、今度は大野城や基肄城を背後に鞠智城が前面に立つわけで、その存在意義が改めてクローズアップされることになったと私はみています。もちろん、律令体制に組

み込まれた大隈や薩摩の地には僧侶が遣わされ、仏教を伝えるという詔勅の趣旨にそった布教活動が行なわれたことは言うまでもありません。布教活動に三宝の一つである仏像が欠かせず、吹上町伊作地区でみつかった金銅宝珠持菩薩もそうした仏像の一つであつたとみることもできます。

そして、持統六年（六九二）の詔が出される三年前、東北陸奥の蝦夷^{えみし}出身の僧侶が中央政府に願ひ出た内容から、辺境の地における布教活動の実態が浮かび上がってきます。それによると、仏教を広めたいと思つても仏像も何も無く是非送つて欲しいというのです。早速、持統天皇は金銅薬師如来と観世音菩薩をはじめ、仏菩薩を莊嚴する釣鐘・香炉などを届けることを許可します。注目されるのは、その中に宝帳と沙羅が含まれていることです。宝帳と沙羅の組み合わせは有名な法隆寺の橘夫人厨子から窺えます。いまは厨子部分が扉で覆われていますが、これは改装して扉付きの厨子にしたからで、本来は四本の八角柱で上部の天蓋^{てんがい}を支える構造で、周囲にレースカーテンのように内部が透けて見える沙羅^{とほり}の帳を張りめぐせたものです（資料篇二四頁図版二）。これほど豪華なものでなくとも、遣わされる僧侶は仏像や經典を持参していたでしょうから、渡来仏はもとより数多くの仏像や經典が準備されたことは言うまでもありません。このように改築期以降の鞠智城の役割を考えると、仏教圏の拡大という視点から再検討してみることも必要ではないでしょうか。

八、新羅における王京慶州の防衛

白村江（錦江の下流域）で敗れた日本は、各地に山城を造つて国防に力を注ぐことになります。ところが、唐と連合して百済や高句麗を滅ぼし、わが国に脅威を及ぼしたはずの新羅もまた国土防衛に走っていたので

す。急遽、都の山城を改修したり新築したり、わが国と一緒になのです。何故かといいますと、白村江での戦いが始まる以前の段階では、もし敗戦するようなことになれば日本軍が百済と連合して新羅に攻め入ることもあり得ますから、それなりの備えをする必要があります。実は新羅にとって最も心配だったのは中国唐軍の動きでした。平壤の高句麗を攻める時は四〇万からの軍隊が中国から朝鮮半島に入って来ましたし、百済の故地には都督府ととくふが設けられ常時数万の軍隊が百済の都に留まっていたのです。また平壤に攻め入った軍隊が今度は新羅を滅ぼそうと下って来るかも知れないわけですから、白村江の戦いが始まると同時に国内の防備を固めはじめていたのです。

新羅の防衛体制がどのように整備されたのか、王京慶州を中心に見てみましょう。資料の慶州広域市の城郭施設（資料篇二一頁図五参照）を見ていただきますと、宮城が設けられていた月城（半月城ともいう）を中心に王京を取り囲む三山（明活山、西兄山、南山）に山頂山城を築き、王京防衛の基本構想を築き上げたのは真平王（即位五七九～六三二）で、王陵が明活山の麓にあるのもそうした業績を称えてのことでしょう。白村江の戦いがはじまるや、新たに南山新城を築き、西兄山城の増改築にも着手しています。南山新城というのは月城の向かいにある南山に築かれた城で、緊急時に逃避するためのものとして月城と一体として考えていいかと思います。西兄山城がある仙桃山（西兄山ともいう）は、観光客がよく利用する高速バスセンターの目の前にあり、頂上直下には有名な磨崖三尊仏があります。登る途中、視界が開けてくると麓に墳丘が並んでいるのが見えてきます。三国を統一した文武王を排出した金氏一族の墓域で、森のように木立で囲まれているのが文武王の父武烈王の陵墓です。これらの山城は直線距離で約五キロメートルしか離れおらず、その中央に王宮があるわけで王京決戦を想定したものではありませんでした。そこで、その外側に外城を築

いて防衛網を強化する必要にせまられたのです。特に、大邱・永川など西部方面からの王京侵攻を想定して築いた新羅最大の山頂山城とされるのが富山城ふさんじょうです。韓国では、山の上に鉢巻をするようにして築く山城を山頂山城と呼び、谷筋を含めるようにして築く山城を包谷式山城として区別しています。谷を含めて山城を築くということは谷筋が低くなった地形を選ぶのですから石積が低く、上に鉢巻すると全体の石積みが高くなる。当たり前の話です。

何とか歩けるうちに山城の石塁を見たいと思って、富山城を含め幾つかの山城に登ったことがあります。富山城の場合、谷筋を入って行くと所々に川を防ぐような形で石垣が築かれていて、それを越えて上に登っていくと、途中、都のあった慶州方向を一望に見渡せます。頂上付近を探してみると築城当時の石塁が今も残っていました。短期間で造ったのでしょうか、花崗岩を砕いて無雑作に積上げた石塁（資料篇二四頁図版三）が山盛りになって残っている、ただそれだけです。富山城は南山新城や明活山城の三倍を超える広さを占めていて、低いところで五〇〇数十メートル、高いところで七〇〇メートル近くもある高所に、鉢巻状に一〇キロに亘って築かれています。南の方に今は牧場となっている平坦地もあるので、あるいは軍馬も一緒に養うような機能も持っていたと考えていいでしょう。何せ城内に三つの村の住民を全部移住させたと記録されているからです。

九、国土防衛と造寺造仏

山城を主体とした新羅の王京防衛についてみてきましたが、わが国に対する外国の脅威という観点から私が見ているのは、朝鮮三国を統一した文武王の存在です。実はわが国における山城の必要性が非常に弱

まったこととも関係します。何故かといいますと、朝鮮で決着がついたからです。唐軍と攻防を繰返していた新羅ですが、文武王の六七六年に唐の軍隊を北に押し返すことに成功したのです。やむなく唐は百済の故地にあった熊津都督府を中国東北部の遼東に移すことで体裁をとらざるを得なかった。これは大唐が実質的に朝鮮支配を諦めたということです。今日の東アジア情勢でもいえることですが、朝鮮半島の安定は日本の安定につながる。それだけ脅威が減ることになるからです。文武王の功績で日本への脅威が無くなった、むしろそう言った方がいいのかもしれませんが。

唐の新羅侵攻を阻止した文武王が次に考えたのは、潜在的な脅威となってきた日本対策で、日本海（韓国では東海という）側の防衛に力を注いでいくことになります。その象徴とされているのが海中王陵です。自分が死んだら東海の大きな岩の上に造るよう遺言したといわれ、荼毘にふされた王の遺骨を埋葬した場所とされているのが、慶州の東海岸（東海口ともいう）に浮かぶ大王岩です。海岸から数百メートル沖にある岩礁のような岩で、航空写真を見ると中央部に十字形の水路が設けられているのがわかります。この人工的な水路の中央部に大きな岩がみえますが、此処に王の遺骨を埋葬したことになります。いわば海中の支石墓のような構造になっているのです。幾度かこの大王岩に渡ったことがありますが、干満の差が著しい八月下旬の大潮をねらって渡ると、干潮時には水路は半ば干上がって巨岩がむきだしになっていました（資料篇二四頁図版四）。

大王岩に葬られた文武王は護国の龍となつて国を護っているとされ、その遺徳を偲んで建てられたのが感恩寺で、二基の新羅石塔が今も雄健な姿をとどめている。海中王陵や感恩寺が造営された東海口をはじめ、吐含山（七四五メートル）の東麓はそれまで防衛の空白地域となってきました。そうした空白地域に新たな

城郭施設を築くとともに、要衝とされる拠点に仏寺を建立、諸仏護持の力によって新羅を防衛する。これが文武王以降の新羅防衛の基本構想であったと私はみています。文武王の死後、彼の構想は子の神文王をはじめ、孝昭、聖徳、孝成、景德の歴代王に受け継がれる。そうして出来上がったのが吐含山系の東麓に残る仏教遺跡なのです。

韓国で最も美しい石仏の一つとされ、慶州へ行ったら石窟庵を訪れない人はいないとされる石窟庵本尊、この仏像もまた王京防衛の一端を担っていたのです。石窟庵は吐含山の東南麓六〇〇メートル近くの高所に造られた人工窟で、窟の前は木造の建物となっていますが、本尊の如来坐像は天井がドーム状となった円形石室の中央に安置されています。石窟が完成したのは八世紀半頃（七五〇年頃）で、文武王が亡くなってから約七〇年、歴代王に受け継がれた防衛構想の最終段階がこの石窟庵造営にあったと見ることができそうです。石窟庵本尊については釈迦とか阿弥陀とかさまざまな意見がありますが、その眼差しは東南に向けられ、文武王が葬られた海中王陵を見守るように造られているともいわれています。また、吐含山東麓の山中にある獐項里磨寺の本尊、吐含山系白頭山にある骨窟庵磨崖石仏の眼差しも、石窟庵本尊と同じ東南の方向を向くように造られているのです（資料篇二二頁図六参照）。この「仏の眼差し」が何を物語っているか、獐項里磨寺出土の石仏や石塔から考えてみましょう。

十、吐含山東麓の仏蹟と仏の眼差し

朝鮮半島の東南角に位置する新羅の都は、東海岸との間を南北に走る吐含山（七四五メートル）を主峰とする山系が自然の障壁となつて護られてきたともいえます。その吐含山東麓の尾根筋を下り、大鐘川の上流

と交わる山中にあるのが獐項里廃寺址で、二基の五層石塔と仏像の台座石、仏殿の礎石が今も残っています。若い頃、この寺跡から搬出された石仏の断片を調査して復元図面を作成してみたところ、石窟庵本尊を凌ぐ大きさで像高が三・五メートル、現地にある台座を含めると高さ五・四メートルにも及ぶ石造如来立像であることがわかってきました。現在は断片を繋ぎ合せて上半身を復元し、博物館の中庭に展示されていますが、彫刻技法も優れ石窟庵本尊より先に造られたと考えられます。その後、補修に保水性が著しい材料を使用したこともあって黒カビが発生、市民の指摘を受けた博物館ではやむなく除去に取り組むことになったという新聞記事がでていました。そうした危険や批判を避けるためではありませんが、こうした文化財の復元に取り組む場合、私は主として非接触式の三次元スキャナーを使い、デジタルデータを利用して復元することになっています。この獐項里出土石仏も二〇〇五年に調査をおこない、三次元のデジタルデータとして復元・保存してあります（資料篇二四頁図版五）。

仮に、この仏像を現地に残っている石造八角台座の上に安置したとしましょう。台座を含め高さ五メートル以上の石仏が仏殿内部にあったことになりますが、建物は三間四方（正面九八七センチ、奥行七八四センチ）の小規模なもので、台座の前方に三メートル弱の空間しか設けられていませんから、この石仏立像のみを収容するために計画されたと考えられるのです。台座は上下二石からなり、八角下台石の各面には格狭間こうざまがあらわされ、内部に甲冑を身につけた神将坐像と獅子が交互に配置されています。注目されるのはその表現と配置が仏殿正面を強く意識した造形となっていることである。正面中央に両腕をあげて如来を支える武人像、その左右に両前足を拳のようにして斜め前方に突き出し、口をあけ蓬髪をなびかせて見る者を威嚇する形相の獅子（資料篇二四頁図版六）が来るように配置し、背面の穏やかな表現と違っている。しかも、仏

殿の左右前方に設けられていた石塔の塔身には、他の新羅石塔では類例のない精巧な仁王像が各八体、武器を片手に表わされていて、これらの造形が造寺造仏のコンセプトを如実に物語っているといえるでしょう。この仏像はまた、頭部に宝冠のような金属製の莊嚴を取り付けた小孔（径一センチ、深さ三センチ）が五個穿たれていました。如来像で宝冠といえば、金剛宝座の釈迦如来、宝冠の阿弥陀、密教系の大日如来と幾つか考えられますが、右手を胸前にあてがう印相のもつ意味とともに不明な部分も多いのです。ただ、本尊が如来であることを除けば、宝冠を戴き足下に地天女のようなアトラス的役割をする武人像と獅子を表すという意味において、西域から伝えられた仏法の守護神ともされる兜跋毘沙門天をイメージしながら、新羅が独自に作り上げた仏像のような気がします。

では景勝地でもなく訪れる人も考えられないような山中に、なぜ巨大な石造如来立像を本尊とする仏殿と石塔が造営されたのでしょうか。考えられることは、吐含山系に源を発する大鐘川上流のこの場所が慶州最大の隠れたアキレス腱だったということが解つたのです。東海岸から大鐘川沿いに遡り、獐項里廢寺のあるところから尾根伝いに登ると難なく自然の障壁となってきた吐含山系を越えられる隠れた古代交通の要衝だったのです。規模はともかく寺を建て僧侶を住まわせることによって、仏法の加護を祈りつつ要衝の監視も行うという二つの目的が果たせることになります。新羅が三国を統一した最大の要因は、“仏国土新羅の建設”をスローガンに僧俗一体となって国難に臨んだことだといわれます。その精神は統一後も受け継がれ、国土防衛に果たす仏教の役割がなくなかったことを示しています。このように王京防衛のアキレス腱ともいえる要衝に造営された造寺造仏が、たとえ象徴的ではあっても防衛施設としての城郭と同様な役割を担っていたことになります。石窟庵本尊や獐項里廢寺本尊にみられた“仏の眼差し”が、文武王が眠る東海岸（東海

口)の彼方をみつめている意味がお解りいただけたでしょうか。

十一、精神論から実利的な防衛力の整備へ

ところで、獐項里廢寺址出土の石造如来立像は右手を胸にあてがう印相をしています。それと似た印相の石仏が山城の一角など防衛の拠点とみられるところから発見され、注目されています。やや扁平な造りの仏像で、光背の周辺にパルメット唐草をめぐらし、U字形の平行衣文をあしらった着衣、右手を胸に左手を腹部にあてがった独特な印相を示しています(資料篇二四頁図版七)。こうした石仏としては、吐含山の山頂ならびに南山付近の寺跡から出土したものがすでに知られていましたが、最近南山新城の一角からかなり大型の石仏がみつかり俄かに注目されることになったのです。その他、尚州という大邱の北に位置する交通の要衝からも見つかつていて、独特な造形とともに出土地にも注目しなければなりません。東岳吐含山と呼ばれるように、出土地の一つである吐含山は新羅五岳の一つとされ、国土の安寧を司る東岳神を祀る山として知られています。その頂上には祠が建てられ天下無双の勇者とされる昔脱解ソクタルの彫像を祀ったとされていて、その分身かどうか分かりませんが国土の安寧と造像という観点からも注目されることです。また手の印相といえば、最近女子サッカーの国際試合で、選手が整列し右手を胸にあてて国家吹奏を聞く姿がよく見受けられます。戦う意思を内に秘め一致団結して勝利を願うパフォーマンスと似ていて興味がもたれます。今後山城がある防衛の拠点や寺跡からこうした石仏が相次いで見つかる可能性もあり、注目していきたいと思えます。

三国統一以降の新羅が、日本の脅威を想定して吐含山の東麓から東海岸にかけての防衛を強化しようすを紹介しましたが、では実際にそうした脅威は存在したのでしょうか。実はあったことがわかっているのです。吐含山系の防衛を強化したとはいえ、王京防衛のアキレス腱としてなお残っていたのが吐含山の西側に開けた平坦地で、慶州と蔚山を結ぶ幹線道路、慶州と釜山を結ぶ鉄道（東海南武線）もすべてここを走っているのです。その防衛のために築かれたのが毛火里の関門城で、平地の毛火里から左右の山地にかけて、二〇キロメートルに及ぶ長城形式の城郭を築き、隣接する山に山頂山城さえ設けています。朝鮮三国の歴史を記した『三国史記』には、聖徳王二十二年（七二二）に毛伐郡城を築き日本の賊路を遮ると出てきます。この毛伐郡城は毛火里の関門城のことで、日本の脅威から王京を護るために実際に築城されたことを示しています。また、この関門城の築城から間もない聖徳王三〇年（七三二）には、日本の兵船三百艘が海を越えて新羅の東辺（東海岸）に攻めてきたので出兵して大破するともあり、文武王が案じた潜在的な日本の脅威が周辺住民を苦しめていたことが窺えます。そうした現実を前に、新羅の国防は精神的なものから実利的な山城構築へと転換されていったのです。やがて新羅が防衛力を整備して、わが国に強硬な外交姿勢を見せ始めるのは八世紀中頃のことであり、筑前の怡土城（現糸島市）築城の計画もそうした東アジア情勢の変化によるものと思います。

今日、日本の国防と外交という観点から、尖閣列島や竹島（韓国では独島という）の領有権問題がさかんに取り上げられています。実は日本が白村江で負けたということは周辺を海に囲まれたわが国にとって決定的なダメージであったことは確かで、その影響は数世紀に及ぶのです。朝鮮半島の沿岸はもとより、黄海から東シナ海にかけての制海権を失い航海術の弱体化さえ招いていたのです。九世紀に入り遣唐船が廃止さ

れる頃には、山東から中国沿岸にかけての制海権を握っていた新羅の力に頼らないと満足な航海さえできない状況に追い込まれていたのです。（円仁の『入唐求法巡礼行記』を参照されたい）